

## 『うつほ物語』 涼の財力と正頼家

猪川 優子

### はじめに

嵯峨院の落胤、源涼は、紀伊の国吹上の地で祖父神南備種松と祖母に養育される。並外れた財産家であつた種松は我が身のすべてを孫に捧げ、涼は莫大な富を持つ人物として物語の出発点に立つ。

血統、資質、人となりが保証され、学芸ことに琴ことに秀でた涼は、仲忠の好敵手としての位置を約束された形で登場する。<sup>1)</sup>しかし、実に吹上・上下二巻が費やされたにもかかわらず、以降の巻々で、相應の〈涼の物語〉が展開されることはない。仲忠に並ぶと称された琴も、(琴の一族の物語)という主軸に対する確固たる軸を築き得ず、徐々にその意味が薄らいでいく。さらに嵯峨院の落胤であるという事実も、独自の物語を形成し、展開するだけの力を持たない。

本稿は、特に物語後半における涼の位置付けを、財力という観点から明らかにするものである。財力は、仲忠が持ち得ない利点であり、涼の方向性を示唆する特質として捉えたいと考える。

### 一 涼の登場——吹上の富——

源涼は、あて宮求婚譚半ばで物語に加わり、以後主要人物の一人に数えられる。吹上・上巻冒頭で語られる祖父種松の富業ぶりと涼への献身は、物語終局まで持続され、涼の財力が揺らぐことはない。種松は、涼のために吹上に四方四季の空間くわんを造り上げる。

吹上の浜のわたりに、広く面白き所を選び求めて、金銀・瑠璃の大殿を造り磨き、四面八町の内に、三重の垣をし、三つの陣を据ゑたり。宮の内、瑠璃を敷き、おとど十、廊・樓などして、紫檀・蘇枋・黒柿・唐桃などいふ木どもを材木として、金銀・瑠璃・車渠・瑪瑙の大殿を造り重ねて、四面巡りて、東の陣の外には春の山、南の陣の外には夏の陰、西の陣の外には秋の林、北には松の林、面を巡りて植ゑたる草・木、ただの姿せず、咲き出づる花の色・木の葉、この世の香に似ず。梅檀・優曇、交じらぬばかりなり。孔雀・鸚鵡の鳥、遊ばぬばかりなり。  
(吹上上・243頁)

ここでの涼の生活は、吹上の源氏の噂を聞きつけた都からの訪問客によつて転機を迎える。三人の若き都人——仲頼・行正・仲忠——を、涼は一月月にわたつて豪勢にもてなす。さらに客人の帰京に際しては、贅を尽くした贈り物を種松に準備させる。そしてその贈り物は、次のように、都に戻つた仲頼たちによつて、内裏をはじめ各所に献上されることとなる。

かくて、この人々、紀伊国より持ていましてる物、興あるは、

人々に奉り給ふ。少将（少将）は内裏に、白銀の旅籠馬は右大将殿に、

破子は宮内卿に、北の方には、透箱より始めて、そこはくの細

けの物、皆取らせ給ふ。侍従（侍従）、白銀の馬は父おとどに、破子は

嵯峨の院に、透箱より始めて、細けの物は北の方に、船と被け

物の中に清らなる物は、思ふ心ありて、まだ持たり。良佐（良佐）は、

妻も子も親もなければ、船は春宮に、旅籠馬は嵯峨の院に、破

子は後の宮に、透箱より始め、細けの物、まだ持たり。

（吹上上・273頁）

吹上の富は都へと運ばれ、各（家）へと納められていく。これが単なる旅の手土産にとどまらないことは、贈られた面々や、品物が「興

ある」ものであったことから窺える。なかでも仲忠が「思ふ心」

あるとして、後にあて宮へと贈られた黄金の船の細工物は、正頼が一度返却するほどの宝であった。

こうした（富の分配）は、俊隆が波斯国より持ち帰った琴の数々を貴頭に献上し、また、正頼が娘たちを活かして閨閣を拡大してい

くといった（横の繋がり）の形成に相当すると考えられる。仲頼は

正頼に、涼の破格の財力を語る。涼が上京する前の時点で、その存在の重さが認識されるのである。さらに種松は「財は、天の下の国

になき所なし。新羅・高麗・常世の国まで積み納むる財（たか）の王（吹上

上・243頁）である。世界中から吹上という一地方に集められた富が、

涼を経由して都にもたらされるといふ、富の仲介者としての涼の位

置もここに確認出来よう。

二 仲忠と涼——転換点としてのあて宮入内——

あて宮求婚譚において、仲忠と涼はともに求婚者であるが、仲忠

## 二 仲忠と涼——転換点としてのあて宮入内——

対涼という構図は描かれない。多数の求婚者たちの存在に加えて、

春宮への入内の可能性をはらんでいるという構造が要因であろう。

それゆえ、涼が富を武器に求婚者たちの中から抜きん出でくること

はない。あて宮をめぐる仲忠と涼の動きに特徴がみられるのは、入

内直後からである。二人は、失意の中であて宮に入内祝いを贈る。

かくて、その時になりて、御車、数のごとし。御供の人、品

々、装束きて、日の暮るるを待ち給ふほどに、仲忠の中將の御

もとより、蒔絵の置口の箱四つに、沈の挿櫛より始めて、よろ

づに、梳髪の具、御髪上げの御調度、よき御仮髻・蔽髪・釵子

・元結・えり櫛より始めて、ありがたくて、御鏡・畳紙・歯黒

めより始めて一具、薫物の箱、白銀の御箱に、唐の合はせ薫物

入れて、沈の御膳に、白銀の箸・薫炉・匙、沈の灰入れて、黒

方を、薫物の炭のやうにして、白銀の炭取りの小さきに入れてな

どして、細やかにうつつしげに入れて奉るとて、御櫛の箱に、か

く書きて奉れたり。

唐櫛筥あけ暮れ物を思ひつつ皆むなしくもなりにけるかな

とて、孫王の君に、夏冬の装束して心ざす。御使、さし置きて

帰らぬ。

かくて、源中將、夏冬の御装束ども、装ひなど麗しうして、沈の置口の箱四つに疊み入れて、包みなど清らにて、かく聞こえ給へり。

人知れず染めわたりつる袖の色も今日いくしほと見るぞ悲しき

とて奉り給へり。宮・おとど、見給ひて、「言ひ知らず麗しき物どもかな」とて、「とどむればあり、返せば情けなし。物は、景迹なる要の物なり。なほとどめつるなり」とて笑ひ給ふ。

(あて宮・354頁)

傍線部が仲忠、破線部が涼からの贈り物である。さらに次の例は、庚申の日に仲忠と涼がそれぞれ、春宮とあて宮に贈り物をする場面である。

源中將のものとより、沈の破子十疋、入れたる物、飯には白粉振るひて入れ、敷物・袋などめて、たうして奉り給へり。藤中將、白銀の透箱十、合はせ薰物、沈の鶴したる透箱、筆・黄金の硯瓶など揃え、唐の錦のいと清らなる、沈の箱に、白銀・黄金の筋遣りて、白銀の碁石筭に、白き瑠璃・紺瑠璃の石作り盛りて、双六の盤・調度、かくのごとくにて、様変へて、碁手の銭、白銀にて、同じ箱にて奉られたり。おとど、見給ひて、「あやしく、わづらはしきわざせらるる中将たちかな」とのたまふ。

(あて宮・361頁)

涼はたしかに富豪であるが、常に涼の贈り物が他を凌ぐわけではな

い。むしろ右の二例では、仲忠からの贈り物に、より比重を置いた描写がなされている。ここには、物語の方向性との関連が窺える。

あて宮入内後、正頼家が直面するのは立坊問題である。以後、正頼家と仲頼は、徐々に結び付きを深めていくのであるが、この時すでに兆しがみられるといえよう。つまり贈り物の描写から、人間関係や物語展開が浮き彫りにされるのである。なお、仲忠があて宮入内に際して贈った品々が、身のそばに置いて使う日用品や、身に付ける装身具であったことは、二人の繋がりが途絶えないという事実を予感させ、注意しておきたい。

### 三 正頼家の涼

沖つ白波巻で、涼は正頼の十四女さま宮と結婚し、仲忠や他の婿たちとともに正頼家に居住する。涼の居所は「絵解」によると東南の町の西北の対で、次のような暮らしぶりであった。

源中納言は、異町面に、金銀・瑠璃・綾・錦して作り磨きて、七つの宝を山と積み、上中下、花のごと飾りて、あるが中に勢ひて住み給ふ。  
(沖つ白波・451頁)

正頼家の婿になった涼と妻さま宮は、祝い事の折々に豪華な贈り物を準備する。涼の財力については、かつて正頼が娘たちの婿がねを妻大宮と検討していた際、次のように難じていた。

「なほ、正頼は、この藤中將こそいとほしけれ。世の常の人に  
もあらず、めでたき公卿の一人子にて、よろづのこと心もとな

からぬ、この世の人の限りなくあらまほしきになむ。藤中将、勢ひはあるまじ。源中将は、いと目もあやに、「一の者なりと見ればこそ、ふさひにはおほえね。必ず、人々思ふ所あらむ」と思へば、人の婿といふものは、若き人などをば、本家の勞りな<sup>ど</sup>として立つるをこそは、面白きことにはすれ。勞り所もなくて、本家の恥づかしくものせらるるなむ、ものしき。さるは、いと見所ある人にこそあれ。この二人の人見る時にこそ、目五つ六つは欲しけれ」とのたまふ。

(内侍のかみ・385頁)

立ち給はむするほどに、大将「まことや、聞こえむとしつ

ることは、明日、御車賜へ」。源中納言、「何々の御料にぞ」。女三の宮、三条に迎へ奉る料なり。人々、いみじく喜び驚き給ふ。

「わが世に、いたはしく、かたはらいたかりつることの、目安きことかな。これは、いかでぞ。殿の、御心と思し立ちたるか。御催しか。大将、「異人の知るべきことならばこそ。』させむ」とあれば。』いとよく侍るなり」と、人々集まりて喜び給ひて、

「車奉り侍らむ。わきても、藤壺の、明日、まかでさせむ」と

あめれば、それが要るべきやうになむ。大将、「それは、まかり出で給はじ。さるものなりとも、暁方にぞ、からうしては、

それも、不用もや」。ここに、なき。昼つ方奉れて、その御

用にもあたりなむ。』いとよかなり」

(略)

(仲忠方) 三条殿にまうで給ひて、南のおとどを見給へば、いと清らにしつらはれたり。しばしあれば、殿ばらより、御車ども奉れ給へり。源中納言殿より、新しき黄金造りの、男ども二十四人、装束一色にて、選り立てて奉り給へり。糸毛には、侍の下臈の男どもに上の衣など着せて、三十人はかりつけたり。御前、四位十人、五位二十人、六位三十人。大将は、「馬に鞍置きて、男ども、帰るべきやうに率てまうで来、一条殿に」と言ひ置き給ひて、父おとど一つ御車にて、御前二人ばかりして、明かくものし給ひぬ。

(藏開下・583頁)

仲忠は、父兼雅の妻の一人である女三宮を迎えにいく際、涼から車を借りる(ア)。その時、藤壺退出の際も涼の車が貸し出されるといふ話が明らかになる(イ)。そして仲忠が借りた車は、非常に高価な上に多数の従者を伴うものであった(ウ)。

このように、物語後半では、涼が財力をもとに徐々に人間関係を形成し、都での地盤を固めていくであろう姿がみられるのである。

涼の財力を示す象徴的な出来事が、次の、藤壺退出と同時に決行される、涼夫妻の正頼邸からの引越しである。

明かくなりゆくまゝに、(藤壺方) 見給へば、このおとどの造り様・しつらひ、さらに言ふべくもあらず。やがて、出で給ふるまゝに、御座ばかりをぞ敷き替へて、夢ばかり取り犯し給ふ

物なし。ただ、御みづからぞ渡り給ふべき。源中納言殿は、沈（たもと）の小唐櫃のをかしげなるに、鎖・鍵、取り具して奉り給ふ。「これ、よき暇なれば、奉りてむ。ここに持て使ひ侍る物どもなり。まかり渡るべき所にも侍るなれば、『何かは』とて。ただ、預からせ給へ」とて、「さて、ここにはおはし住ませ給へ。寝殿は、いと悪かめり。これは、もとのをば取り違へて、かの、吹上といひける所を、取りに遣りて奉るなめれば、いと住みよし。この西なる屋どもなんども、かしこのなれば、対のやうになむ。そがうちにも、とかく、よかるべきにせさせたる所なめり」と聞こえ給へば、大宮・女御の君、「げに、いかでか、これがやうなる所は、いづくにもあらむ。いと、物よくこそ、この筋あたり給ふめれ」とのたまふほどに、

(国譲上・634頁)

北（きたま）の方、「殿内など、今日御覽せよ」とのたまへば、「宮もこのもききみも、開かせ給はむずれば」と思して立てたる香の唐櫃ども、いみじう清らに十ばかりあり、開けて見給へば、よろづの宝物、絹・綾など、さまざまにあり。また、さまざまなる物に入れつつ、さらぬ物もいと多かり。外には、三尺の沈の御厨子、浅香の四尺の御厨子二具、よろづの、男・女の使ひ給ふべき調度ども、ありがたき、清らにて、数を尽くしてあり。すべて、よろづの調度・厨子などあり。六尺ばかりの金銅の時絵の厨子四つ、それに、白銀の御器調じ、よろづの調度、白銀に

し据えたり。今片方には、さまざまの物ども、いと多かり。このおとどの西に、七間の、檜皮葺きにてあり。左、右の渡殿あり。御厨子所には、その西の屋をしたり。そこには、白銀の秤二十ばかり、小さきなど、同じ。釜には甌具しつづ、その具ども、いとめでたうてあり。殿のうちともに、いけらくに使ふべき物ども、いと多かり。そのくしの前に、十一間の檜皮屋あり。それは納殿にて、米・よろづの物を納めたり。かかれば、藤（ふじ）壺「思ほえず、富をもせさせ給へるかな。あな愛。君よ、あいな頼みして、居眠りし給はむに」。北の方、「などか。さも眠らまほしうなむ。この三条といふ所は、また、京にも上らざりける時、設けたりけるとかや。『このあめる者の具に』とぞ、すなはちより言ふめる。されば、あいな頼めにもあらじや」

(国譲上・642頁)

暁、源中納言殿渡り給ひなむとす。御車二十ばかり、御前、いとなく設けられたり。ひに二のわうはなどして渡り給ひぬ。この殿は、堀川よりは東、三条の大路よりは北二町、吹上の壺（うぶ）造り磨きて、よろづの調度は、片山に積みたるやうにておはす。

(国譲上・643頁)

涼は正頼邸における自分たちの居所を改装し、(吹上)の空間を再構築していた(エ)。この場における主導権は、さま宮である。さま宮は、鍵を開け、部屋を次々と案内していく。藤壺をはじめ大宮や仁

弄殿の女御は、圧倒的な豪華さの前に感嘆するしかなく(才)、  
まるで涼の財力が正頼家に見せつけられるかのような一幕である。

婿たちが次々と正頼邸を離れ、最後に涼が富の一部を残して去り、  
別の場所で新たな(吹上)の空間を設ける(キ)という流れは、正  
頼家の驕りを思わせる。正頼の、婿の財力に対する不満も、将来、  
涼が「本家(実家)」となった時には、強大な政治力の基盤となり得  
る。涼が「財の王」を後ろ盾として娘の入内を視野に入れていたこ  
とも、正頼の口から語られる。正頼家の勢力の減退に反比例するよ  
うに、涼が次の源氏の担い手として台頭してくることを予感させる  
のである。

## おわりに

物語に華々しく登場した涼が、徐々に平凡な存在へと変化してい  
くことについては、諸氏が論じるところである。ただ、涼が完全に  
物語から姿を消すことはない。昇進に遅れはあるものの、仲忠との  
関係は良好であり、何よりその財力には衰えがない。仲忠と涼の間  
には、藤氏と源氏という(家)の問題が常に立ちまわっている。  
情勢次第で両者が拮抗する可能性は多分に残されているのである。

『うつほ物語』における贈答については、他にも興味深い点が多  
い。描かれる品物も多岐にわたる。(物を贈る)行為自体についての  
考察を含めて、改めて別稿を用意したい。

## 〔注〕

(1) 涼の登場については、大井田晴彦氏が「吹上の源氏——涼の登場をめ  
くって——」(『中古文学』58 平8・11)「うつほ物語の世界」平14  
風間書房 所収)で、嵯峨源氏との関連などから論じられている。

(2) 吹上の空間については、室城秀之氏が「うつほ物語」の空間——吹  
上の時空をめくって——(『国語と国文学』昭62・5)「うつほ物語の表  
現と論理」平8 若草書房 所収)で俊蔭一族との関連などから論じ  
られている。

(3) 拙稿「うつほ物語」の(秘琴)と(あて宮)——「繋がり」の形成を  
めぐって——(『古代中世国文学』9 平9・3)。

(4) 拙稿「うつほ物語」枯澄と近澄——繰り返される(あて宮求婚譚)——  
(『古代中世国文学』19 平15・6)。

\*うつほ物語本文の引用は、『うつほ物語 全 改訂版』(室城秀之校注  
平7初版・平13改訂版 おうふう)に拠り、一部私に傍線や注記を施  
した。また引用末尾に巻名と頁数を記した。

——いかわ・ゆうこ、弓削商船高等専門学校校助教——